

醴泉郡の小さな村・松潭の暮らしと語り

金美榮・南富鎮・樋口淳

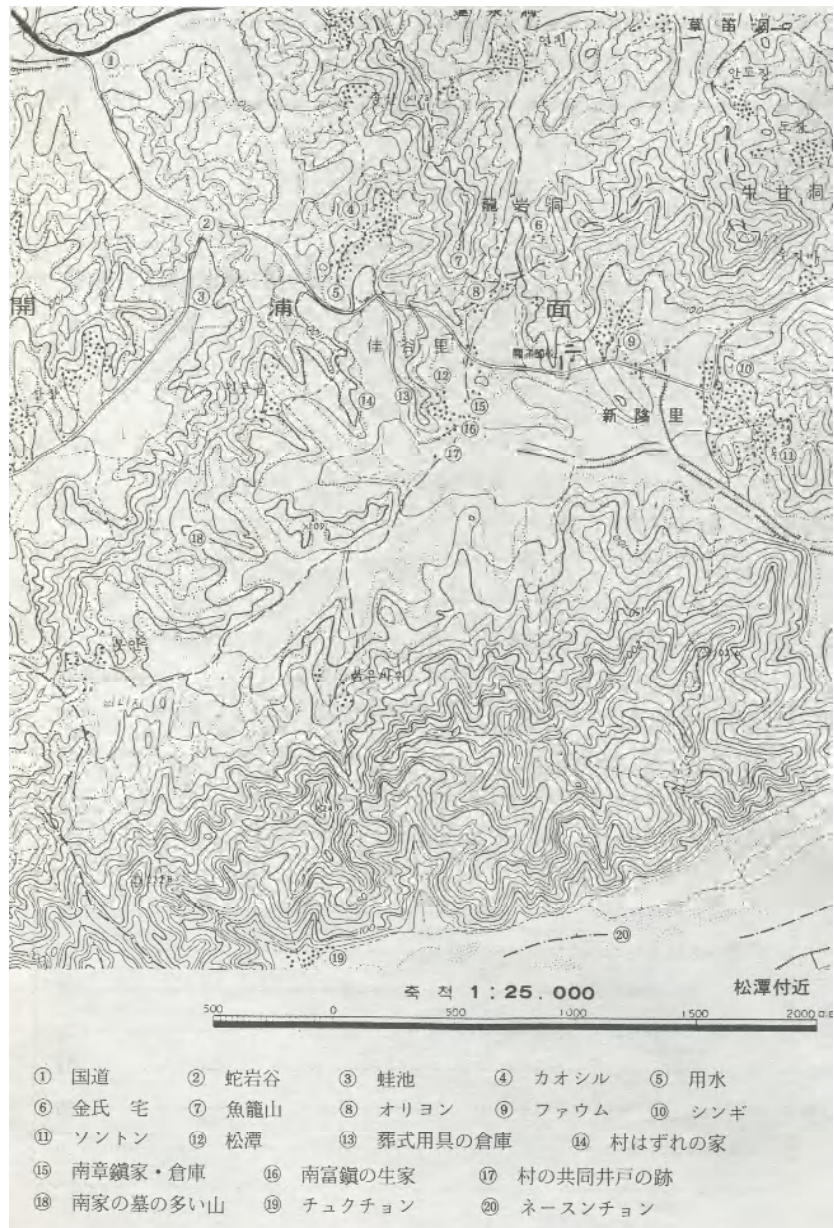
1 松潭の村と家（セマウル運動のこと）

ソクタム（松潭）は、慶尚北道の山に囲まれた小さな村である。行政的には醴泉郡開浦面佳谷一里に属し、戸数は1989年4月現在で35戸あまり。小さな谷の入り口に位置し、村の北と西側とに山をひかえ、南に川をおいた典型的な韓国の古い村の形をそなえている。谷の奥にはさらにオリョン（魚籠）、ヨンアム（龍岩）という部落があり、伝承によれば、松潭、魚籠、龍岩の順で村が出来上がっていったらしい。松潭は、伝統的には英陽南氏松亭公派のみの同族村であったが、現在では後入りの家筋である金氏も13戸を数え一つの門中をなしている。

（注1）

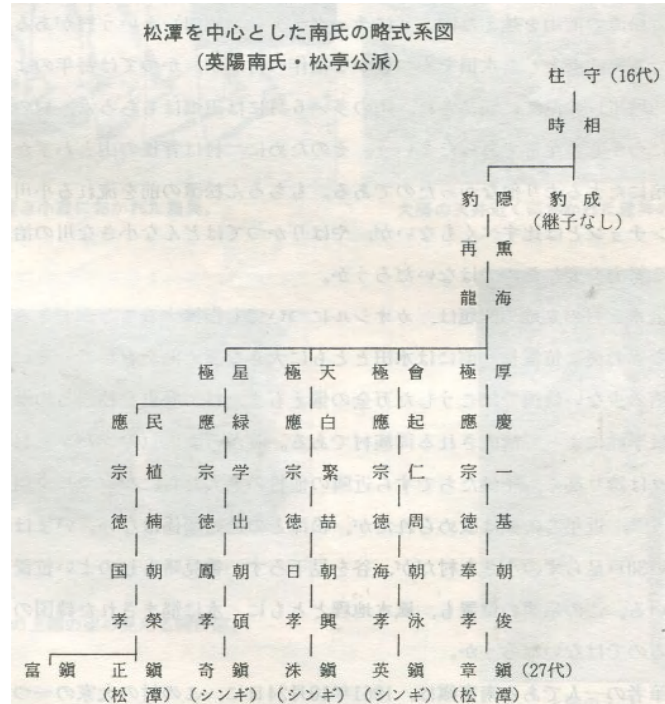
松潭の南氏は、現在25戸で、四つの大家（クンチベ）に分かれ、それぞれが祖先祭祀を行っている。その中でも最も歴史が古く、大きな家筋は南章鎮家であり、かつては時祭など大切な祖先祭祀はこの家を中心に営まれた。

しかし松潭における南氏の歴史は以外に浅く、宗家である南章鎮家の族譜をたどっても16代祖の南豹隠までしか直系を溯ることができない。現在の当主章鎮が25代目であるから、仮に一代を25年とみてもわずか250年に過ぎない。このことは、松潭の自然村としての見事な構造から見て腑に落ちぬことではある



が、村の伝承とは一致する。村の古老たちの話では、一帯の村の中でもっとも歴史の古いのは松潭の東に位置するソントン、続いて北側のカオシルで、ともに500年ほどの歴史をもつという。

ソントンは北に山を控え、南に川、東西に小さな丘をおき、風水地理説にのっとりた見事な構造を持つ。戸数も村の北側に伸びるシンギを会わせれば100戸をゆうに越える。この地方の歴史を辿っても、仁辰倭乱の折りに残された記録にもソントン付近の地名が現れるという。(注2) このことから、松潭はソントンからシンギ、ファウム



と発展して、ここ100年から150年の間に成立した枝村ではないかと考える人もいる。確かに、かつては今日ほど治水が容易ではなく、水稻耕作も山にそった小さな谷沿いのほうが便利であったことを考え合わせると、松潭のように比較的広い平地に面した村の歴史は存外浅いのもかもしれない。

たとえば、松潭の前山を越えた向こうにソチョンという村がある。ソチョンは現在でこそ広々とした水田をもつ豊かな稲作の村だが、かつては毎年のようにノースンチョンの氾濫に悩まされ、雨の多い6月には田畑はもちろん、村の奥の家まですっぽり水につかるのが常であったという。そのために、村は背後の山とわずかの畑、それに果樹の栽培にたよるより他なかったのである。もちろん松潭の前を流れる小川のような川と、ノースンチョンとは比すべくもないが、やはりかつてはどんな小さな川の治水も今日の想像を絶する努力を要したのである。

こうした治水と村の立地の問題は、カオシルについても指摘することができる。この村もまた、小さな谷の奥に位置し、前には水田とともに大きな溜め池を有している。6月の雨季をのぞいて雨の少ない韓国ではこうした万全の備えもまた村の歴史を物語るのもかもしれない。

カオシルは李姓のみによって構成される同族村である。昔から両班村として知られ、村の人々は誇り高く、子供たちですら近隣の多村の老人たちにパンマルを用いるほどであったという(注3)。近年この風は改められたが、松潭との通婚関係はない。今は松潭とあまりかわりない30戸足らずの小さな村だが、谷を見下ろす一番見晴らしのよい位置に美しい宗閣をもっている。この宗閣の位置も、風水地理とともに、水に悩まされた韓国の古い村の形を示しているのではないだろうか。

本稿の執筆者の一人である南富鎮は、1961年10月24日に、この村の宗家一つであ

る現在の南正鎮家の次男として生まれた。南正鎮家の門中は、ソウルや大邱への転出によって、わずかに5、6戸を数えるにすぎないが、直系を20代祖の應民までたどることができるから、ゆうに100年以上の歴史をもつ村の大家の一つである。

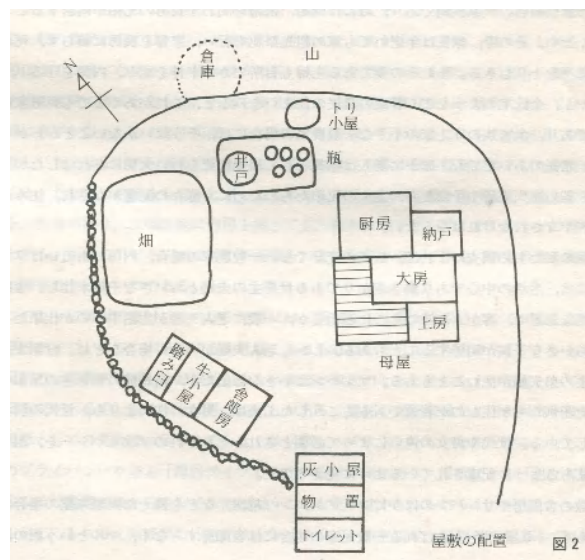
儒教の深く浸透したこの地方の村では、村の入り口にチャンスンはなく、山に山神を祀ることもしない。松潭の場合にも、村の入り口にはチャンスンかわりに共同の井戸があり、祭りに用いる大切な香木が一本植えられていた。井戸の辺りには、他にもいわゆる「堂山木」に似た大木が日陰をつくっていた。この古い井戸が埋められ、香木や「堂山木」が切られたのは、1972年のセマウル運動の時である。

セマウル運動の時はまず道をつくり、それから村の古い家を造りかえる。藁屋根と土壁で造られたかつての家を土台から壊し、瓦やスレートで屋根を葺きかえ、土の代わりにセメントやブロックを使い、ガラスの明るい窓をつける。かつての地割りや棟割りは大方残されるが、家の構造は微妙にかわる。幼かった南富鎮の記憶によれば、当時、古い家を倒すと床下から多くの笛が現れた。尺八のような竹の根を使った笛で、どこの家からも家の木の床下から出ることが多かった。笛が建築儀礼上の呪術的意味を負ったものか、祭りの祭具であったのか今はまだ分からないが、竹はこの地方には自生しないので、いずれにせよ全羅道のあたりから遠く旅してきたものであろう。

松潭の家はほとんど全てその時に建てかえられたので、現在では当時そのままの家は残されていない。そこで正確を期するために、谷を少し溯って龍岩洞の金喆炯氏宅（柳川面龍岩洞62番地）を例にとってこの村一帯の住居の構造を考えてみよう



金氏宅は、1930年ころ建てられた比較的新しい家なので、セマウル運動による建てかえをまぬがれた。藁葺き屋根、土壁造りの伝統家屋で、三つの棟に分かれ、①内房、上房、台所、納戸を備えた母屋と②舎郎房、牛舎、物置、踏み臼の作業場のついた離れ、それに③倉庫、トイレ、肥料置き場のついた小屋がある。これら三棟は図のように配置され、母屋と離れの間には内庭がある。庭の一角は、菜園で普段使いの野菜などを作っている。台所の前の庭には井戸があり、その横にトエンジャンなどの瓶置き場、後には鶏小屋がある。母屋は低いなだらかな山を背にしているが、その山肌を利用して横穴が掘られ倉庫に使われている。



家族の生活の中心となるのは母屋のクンバンであり、この地方では一般に「アンバン（内房）」と呼ばれているが、その奥にはサンシン（産神）の瓢箪Aとヨンタンジ（龍瓶）の瓶Bが祀られている。クンバンとサンバンの間の柱Cは、日本の大黒柱と同じく神聖な役割をもつ大い梁を支え、その空間にはソングジュ（成主）が祀られている。トジャンバンは、米などの穀物や食べ物を納める納戸だが、その裏Dにはトジュ（基主）という屋敬神の瓶がおかれている。



金氏宅は、きわめて美しく、完全な形でこの地方の伝統家屋の形式を残しているものと思われるが、なかでも素晴らしいのはその民具の豊さである。舎郎房の一角にしつらえられた踏み臼をはじめ、さまざまなシンプルで機能的な道具が今も生活の中に生きている。



オンドルの炊き口は台所のカマドと、舎郎房の横の牛小屋だが、舎郎房のオンドルは冬の間、牛の糞を煮る大窯の余熱を利用して、たいへん合理的である。戸外にトイレのあるのも、冬の間は不自由だが、トイレは同時に堆肥置き場であり、灰もここに保存するので、農作業には欠くことの出来ない工夫である。



尚州、安東をひかえたこの地方は伝統的に両班社会であり、両班家庭の場合には儒教の「男女有別」思想の影響の下に家屋は、男女別の厳しい住み分けが行われてきた。しばしば豪壮な造りをもつ両班家屋の生活は、男たちの場である舎郎房、女たちの場である内房を中心に営まれ、舎郎房は

家長、内房は主婦によって管理されていた。韓国の伝統的な居住形態は、三世同居の大家族制であり、時には既婚、未婚を問わず長



男の兄弟が同居することも少なくない。その際、家長は年老いても家の祖先祭祀を行い、家督を長男に譲らず、死ぬまで舎郎房をとりしきる。またその妻である主婦も台所のカマド神

を祀り、内房を守る(注4)。

しかし、金氏宅のようなごく普通の農民の住まいをみると、これがあくまでも両班家庭の原則であり、大家族のうえ家の小さな一般農家の場合には、そうはいかないことがわかってくる。常民のあいだでも、確かに老人は家長として祖先祭祀を行い大切にされはしたが、同時に、若い主人夫婦や子供たち、主人の兄弟たちのためにも様々の配慮がなされ、住みわけに工夫がなされなければならない。



今回の私たちの調査によれば、広さの充分でない一般農家の場合、内房(あるいはクンバン)には、生活の中心であり働きざかりである世帯主の夫婦とちいさな子供が住む。舎郎房は大切な部屋で、客がきた時にそこに迎えるが、一般に老人夫婦が生活するのが仕来たりで、時にちいさな子供が同居することもある。しかし老人夫婦がいない場合などは、分家まえの世帯主の弟夫婦が住むこともある。サンバンは小さな部屋だが、結婚前の世帯主の兄弟や成長した子供たちが住むのが普通である。こうした工夫は、男女の性別よりも、世代の別を中心としている。世代や男女の違いによって必要とされるそれぞれのプライバシーを、出来るだけまもるように配慮されているように見えるのだ。

複数の舎郎房やサンバンのほかにコンノンバン(越房)などを備えた両班家屋の場合はいざしらず、「草屋三間」とよばれる一般民家の場合には舎郎房すらなく、マルという板の間をマルという板の間を挟んで内房と上房の二しか部屋がないことも多かった。しかもこの二つの部屋はオンドルによる保温のためにきわめて狭く、せいぜい四畳半程度にすぎないのである。この狭い空間に三世代が同居するためには、相当の工夫がいったに違いない。

韓国の農家は、田の字型が多くしかも襖や板戸で間仕切りをする日本の農家とは、かなり構造が違う。しかしその居住形態の比較でたいへん興味深いのは、内房に住む主婦の「内房渡し」(アンバンムルリム)である。安東地方を中心とした両班社会では、すでに述べたように主人は舎郎房、主婦は内房に住む。しかし主婦は、だいたい50歳から60歳になると、内房や大庁という板の間にある大切な物を納めた家具の鍵や、台所の管理権を長男の嫁に渡し、越房に移り住む。代わって嫁が内房に入って、家計の一切を管理するのである。これは、日本の「杓子渡し」「へら渡し」とよく似ている。日本の場合と大きく異なるのは、「内房渡し」があくまで主婦権だけの譲渡にとどまり、家長が日本のように「財布渡し」などをして家長の権利を長男に譲渡しないこと。そしてさらに、主婦が「内房渡し」の後も、「男女有別」の住み分け論理に従い、夫と同居しないことである。

しかし、これもまたよく見ると両班社会だけの原則であることが分かってくる。松潭のような一般の農民社会では、もっと細かく入り組んだ工夫が生きている。こうした社会では、内房はすでに述べたように、働き盛りの若い夫婦の生活の場である。この場合、親たちは長男夫婦の世帯の確立とともに、内房を譲り渡し、舎郎房に移り住む。場合によってな、長男

夫婦に息子が誕生したことを契機にこの住まいの交換が行われることもあるが、形式的な「内房渡し」などはないのが普通である。この場合には、日本の隠居制度とよく似た制度が見えてくる。ただ、この場合も日本とずいぶん異なるのは家計の管理と家の祭祀の権力の譲渡である。松潭の場合、主婦は嫁に内房を渡しても、財布は渡さない。またカマドの神をはじめとする、主婦の司るイエの神の祭祀権も、よほど年をとって体力、気力の衰えぬかぎり嫁に渡すことはないのである(注5)。

このように韓国の農村社会の居住形態には、両班型の「男女住み分けタイプ」と農民型の「隠居タイプ」の二つが並存する。普通これは両班型の「男女住み分けタイプ」が基本で、農民型の「隠居タイプ」は部屋数が少ない貧しい農民のとった止むをえぬ措置として説明されそうだが、必ずしもそうとは思えぬふしがある。農村の支配階級としての両班や彼等の支配思想としての儒教は、言うまでもなく後代になって成立したものなのだから、むしろ世代別のプライバシーを守る「隠居タイプ」の住み分けが先にあり、儒教による「男女有別」型の住み分け論理が後からやってきたということも充分考えられるだろう。

しかし、もちろん両班型の「男女住み分けタイプ」の生活も、儒教のみによって説明されるものではない。家長に支配された男性集団と主婦に支配された女性集団の完全な住み分けは、儒教のあるなしに関わらず、人間のきわめて古い居住形態の一つであろう。この場合には、松潭に見られるような「隠居タイプ」の住み分けが、後代の変形ということになるのかもしれない。

いずれにせよ、この点は日本の居住形態との比較の上でかなり面白い問題を含んでいるように思われる。そこで、次に家の住み分けの権利と並んで重要な祭祀の問題を考えることによって、この問題をもう少し掘り下げてみよう。

2 祖先の祭祀と家の祭り

①祖先の祭祀

韓国の家長の権利は、家族の監督、財産の管理・運営、家の代表など多岐にわたるが、なかでもその中核をなすのは祖先の祭祀権である。韓国の祖先祭祀は、家で祭りをを行う家祭と墓に赴いて行う墓祭に大別される。

a 家祭

家祭は、死者のための三年の喪が明けたのちに営まれる祭で、四世代まで溯って祖先を祭る。これには、各祖先の命日に行われる「忌祭祀」と元旦や秋夕などの名節の朝に行われる「茶礼」の二つがある。

南富鎮の家は村の大家の一つであったから、忌祭祀を年に7回行った。この日は、死者(オニ)を迎えるために大きく門を開き、庭の洗濯



ヒモなど障害物をあらかじめ取り除いておく。祭は男達によって行われ、祭祀の権利と義務は家長から長男へと厳しく受け継がれてゆく。

忌祭祀の前夜になると南家の一族の男達が白い韓服の正装で三々五々集まってくる。祭りの準備は主婦の仕事であり、内房に膳をしつらえ供え物を用意して、オリオン座の星の位置で時を測る。祭は、真夜中の十二時に始められる。かつては時計がなかったので、星をみて時を測った。もしこの時を測り間違えて夜が明けてしまうと、死者（オニ）が祭りをして貰えずにあの世に帰らねばならない。これは大変なことである。だから、時を測りそこなった主婦は叱られるし、正確に時を告げることなく夜中に早鳴きしてしまうニワトリは直ちに殺された。

茶礼は、元旦や秋夕にさいして年に2回ほど行われる。やはり大家である南家では、内房に膳をしつらえ、一族を集めて祭を行った。

㊦ 墓祭

忌祭祀や茶礼が、家で行われるのに対して、墓祭は直接に先祖の墓まで一族が赴いて、墓の前で営まれる。毎年9月の末から10月の20日までの間に十寸以内の親族が集まり五代以上の祖先を祀る。

これらの古い墓は「上代の墓」と呼ばれるが、松原の衛門中の場合には、直接の始祖となる南桂守の墓が村から4キロほどはなれた龍宮面の元堂山にあるので、まずここに赴き祭りをを行い、しかる後に祖先の墓を古い順に回る。

距離の遠い墓には、門中の蟹田があり墓の管理者がいて祭りの準備をするが、村に近い墓の場合は、宗家である南章鏃家にあつまり、やはり衛氏のすむとなり村のシングの大家と協力して祭りをおこなう。食べ物と酒を用意し、あちこちの山に散在する墓に詣でるので、道が悪く車のない時代には三日ほどかかった。餅と果物などの祭物や祭器をかついで山にのぼるのが、とても苦しい。

そして一通り上代の墓を回り、一族の祭りをすませると、今度は祖父母や父など、比較的ちかい死者の墓を家族で訪れることになる。この季節は、村の山々を人々がいっぱい訪れ、山が祭服で白くみえるほどであった。

こうした墓祭は、今日でも行われているが、かなり簡略化され、秋夕の茶礼のあとに一族で付近の墓をまわることが多くなった。これは、旧暦の正月と秋夕が公の祝



日となり、村を離れた都市生活者たちの帰郷がこの時期に集中するために生まれた新しい傾向である。

しかし、南富鎮の記憶するかぎり、祖先の祭りの仕方が一番大きく変わったのは、やはりセマウル運動をとおしてである。

かつて、祭りはすべて農事暦にそって旧暦で行われたが、朴正熙大統領時代の1973年に、祭りをすべて新暦で簡素に行うようにという「家庭儀礼準則法施行令」が施行され、祭りの華やかさが一挙に失われた。この改革はきわめてラディカルで、たとえば、当時の公務員は旧暦の正月に休みをとることができず、うっかり旧暦で正月を祝うために帰郷したりすると、さっそく首をきられた。また、当然、学校も休みにならず、教師はその日になると、特別に児童の欠席の調査をおこない、報告することを義務づけられたという。

祭りの規模もできるだけ簡素にということで、新暦の祭りはまるで季節はずれで味気ないばかりか、心のともなわぬ、間の抜けたものになった。

このまえの年までは、正月になると大人も子どもも村をまわり、年寄りをたずねては挨拶をかわし、大人には酒がでて、子どもにはお年玉や菓子や甘酒がふるまわれ、みんなで御馳走をたのしんだのに、急に寂しくなった。前年までの正月三ケ日は、村の小道は挨拶をかわす人たちであふれていたが、この年からは周囲の目をおそれ、たがいに監視しあうようになつたのである。

こうした極端な改革は、のちに改められたが、かつての祭りの賑わいはもう帰ってこなかった。若者が村をさり、農村の過疎化が進行したことはいうまでもないが、新暦が定着し、農業の技術指導がゆきわたって、農事暦と生活のサイクルがすっかり変化したのである。

セマウル運動以降の技術革新によって、ビニールハウスが多用され、稲の品種が改良されて、田植えの時期が早まり、稲刈りはかつてより一ヶ月半も早められた。唐辛子やゴマの収穫も二か月くらい早くなった。暦に種まきや、田植えの相談をする必要がなくなり、老人に田畑の仕事の伺いをたてる必要がなくなった。灌漑施設の充実によって、日照りや洪水や病虫害にも、祖先や神の力をたのむ必要がなくなったのである。

こうした環境のなかで、季節の祭りや伝承が意味を失い、時と所を失いつつあるのも、当然の帰結であるといえるだろう。

②家の祭り

祖先の祭祀が男達によって主宰されるのに対して、家の祭りはほぼ女達の独壇場である。安東地方の家々には、大概つぎのような神が祀られている。

a サン（産）神：産の不浄を忌まず、産婦を守り、元気な子供が生まれ、丈夫に育つように守護する神。神体はパガジ（瓢箪）またはタンジ（瓶）で、内房に安置されている。

b ヨン（龍）タンジ：家族全体の健康を守る神。神体はタンジで、産神パガジと対をなす形で内房に安置されていることが多い。

c トジュ（基主）神：屋敷の神。家と土地を守る。神体がない場合もあるが、大抵はタン

ジで、トゥエンジャンやキムチなどの瓶をおくチャンドクテや家の裏などに安置される。

d オップ（業）神：家の財産や幸福を司る神。ヒキガエルなどの家にすむ小動物であることが多く、この動物が家を出て行くと福が逃げるといい、そんな時には主婦が呼び戻す儀礼を行う。

e チュワン（竈王）：主婦をはじめとする女の健康と台所の食べ物を守る。神体がないこともあるが、台所の竈の上に小さな棚を設けて、主婦が毎朝水や塩を供えることもある。

f ソンジュ（成主）神：家長の健康や社会的地位など運命を司る神。家の中心となる天井の梁に紙の札をはることもあるが、瓶や俵の中に糶を詰めて安置することもある。

g 廁神：神体のないことも多いが、人に罰を与える恐ろしい神と考えられている。ことに便所に入る前には、咳ばらいを一つして合図をしないと、神の怒りにふれる。また便所に間違っただけで片足をつっこんでしまった時には、ムーダンを呼ぶか、主婦がかわって祭りをしなければならない。

これらの神々の祭りは、成主の場合をのぞいて主婦が執り行なうのが原則である。主婦が、すでに述べた「内房渡し」を行ったり、心身の力が衰えたりした場合には、長男の嫁に龍タンジ、基主、竈王の祭祀を譲り渡すことはあるが、産神、業神、廁神の祭祀は行うのが普通である。これに対して、成主の場合だけは一家の主がこれを祭ることが多く、家長が旅をしたり、長期の不在の場合にのみ主婦がその無事を祈って、成主を祭るといふ。成主を女が祈り、糶の交換だけを男が行うこともある。

南富鎮の家の場合には、奇妙なことにこの地方に多い産神を祀ることがなく、龍タンジ、竈王、成主の三つの神だけが祀られていた。しかしこれらの神が、それぞれ家の神（龍タンジ）、女の神（竈王）、男の神（成主）という家のとって本質的な三つの機能を分かちもっていたことは、銘記すべきであろう。これらの祭りを行うのは、ハルモニの大切な役割であった。

龍タンジは内房にあり、瓶のなかには米が納められていた。普段は別に祈ることはしないが、旧暦の正月と秋夕（8月15日）には御飯を供えて祭りをを行う。瓶の中の米は、秋の収穫の後に入れ替えるが、客の来ない日を選んでこの米で御飯をたいて家内の者のみで共食をする。この米を間違っただけで外の者に与えてしまうと、家の福を外に逃がしてしまうので、細心の注意が必要とされた。

竈王は、神体もなく、普通の時は祈ることもしないが、旧の正月十五日にロウソクに火をともし、祭りをを行う。

成主は、俵の中に糶を入れて、マル（板の間）に安置しておく。南富鎮の家では、この神を祭るのも家長ではなく、主婦である。俵に納められた糶は秋の稲刈りの後に取り替えるが、その時の唱え言は「成主は大主を信じ、大主は成主を信じ、なにとぞ全てのことがうまく行くよう守って下さい」というものである。

また1月15日の朝、一番鶏がなくと共同井戸にゆき水を汲み、成主に供えた。共同井戸

には、龍神がすんでおり、この水は「龍の卵」であると信じられていたのである。

しかしこの成主に関してもっとも注目すべきことは、神体の俵の交換の儀礼である。これは家長が60歳の還暦をすぎ、長男が奇数の年齢に達した年に行われる。この日は一日、門に白い紙をさした注連縄をはり、シャーマンによる儀礼を行い、神体の俵を新しいものと交換する(注6)。これは明らかに新しい家長の誕生の儀礼であり、家長の死にいたるまで隠居制度や祖先祭祀権の移譲のないこの国でも、実はその交替が祭祀のなかに潜んでおり、しかもそれが稲作の粕と結びついていたことは、きわめて意味深長である。

このように、村の祖先祭祀と家の神の祭りとを少し詳しく見てみると、そこには男達を中心とした男系祖先を守る祭祀集団と家の神を守る女系の祭祀集団とが、きわめて明確に分化していることがわかる。その祭祀の権利と義務は、祖先祭祀の場合には男子の家長に、家の神の場合には女子の主婦に委ねられており、その務めは死に至るまで守られる。しかしそこには、自ずと世俗的な権力との交錯があり、それぞれほぼ還暦の年を目安にして聖俗の権力の交替が用意されているように思われる。それが目に見えて行われるのが、女子の場合には「内房渡し」であり、男子の場合には「成主の俵の交替」ではないだろうか。

韓国の男子家長の権力は、ほぼ絶対ともいえるもので、その死に至るまで、祭祀権を譲り渡すことがないだけでなく、家の家督権、財産権、代表権を保持するのが通例である。しかし同じ慶尚北道の慶山郡を調査した竹田旦氏によれば、家長は40歳を越せば財産の管理の一部を長男に譲るといふ。もちろん田畑の耕作を完全に息子に譲るのは70歳を過ぎてからだというから、相当なものだが、還暦あたりを境に隠居の道を歩みはじめるのではないだろうか(注7)。家長が舎郎房に住むということも、確かに権力の象徴的な空間支配ではあるが、そこにハルモニがともに住んでしまえば、まことに結構な隠居住まいのようにも見えるのである。

韓国の伝統社会では、一般に女性の力はきわめて微弱であったとされる。確かに、広い屋敷の中に閉じこめられ、ろくに外出もできなかつた両班家庭の場合を考えると、その観が強いが、一般の農民社会では必ずしもそうではなかつたようにも思われる。ことに男子を生み主婦の座についた女性の地位は、男性と比べても遜色はない。主婦には、家の神の祭祀権のほぼ一切が委ねられていたし、日常の家計は完全にその支配下にあつたといつてよい。ことに現金収入の少なかつた時代に、ときたま市場にいつて物の売り買いをしたのは女たちであつたし、主婦はその元締めであつた。また日常の食生活の一切は主婦の仕事であつたので、米の出し入れの管理から御飯の盛り付けに至るまで女達の領域を支配した主婦の力は絶大であつたといえる。主婦の管理した家の様々の鍵は、この権力の象徴であつたといつてよい。これは、一方で嫁と姑の激しい葛藤を生み出すと同時に「内房渡し」のような制度を生み出す基盤となつたのであろう。主婦の家の神の祭祀権は男達の場合と同じくほぼ死に至るまで保持されたのである。

しかし、こうした祖先祭祀や家の祭りのほかに、かつての村には家や親族といった血縁を越えて、人々の協力する村の祭りがあつた。このうちから、次にもっともその結束のはつき

りと表れる農楽と葬式の場合を考えてみよう。

3 農楽と葬式

① 農 楽

かつて松潭の村には四大祭りといわれた正月、寒食、端午、秋夕のほかにもたくさんの祭りがあり、それぞれ盛んに祝われていた。たとえば、端午の祭りには、女たちが日本の柏餅に似たソンプジョン（松片）や蓬餅を作り、ブランコ遊びを楽しむ。この日に、底の片隅からグングング草（弓箭・シラネセンキュウ）をとって髪にさすと一年の間病気にかからないといわれた。

七夕には、村の者がみな共同井戸に集まって井戸の掃除をして、御馳走を食べる。

冬至には、小豆粥をこしらえて底や台所の隅にまく。そしてヨントンジとソングジュに供えて、家内の安全を祈る。小豆の粥は、血の色をしているので、オニをおさえるともいわれていた。

しかしこうした祭りのなかで、もっとも大きな祭りは旧正月の十五日の祝いであった。松潭では1960年代の末まで、この日には農楽が行われ、村の各戸をまわって地神を踏み、厄を払い、豊穰を祈願した。



正月十五日の朝は、農楽に必要な楽器など道具は南門中の宗家である南章淑家の倉庫にまわれているので、一同はそこでまず支度をする。そして農楽の時にかならず被るコカルという帽子をぬいで、「ケジナチンチンネーナ」という楽しい唄をうたう。

きょうは、ここで遊び	ケジナチンチンネーナ
あしたは、どこで遊ぶかな	ケジナチンチンネーナ
短いみしかい一日よ	ケジナチンチンネーナ
いつ、もどってくるかな	ケジナチンチンネーナ
オルシク ジルシク よくもする	ケジナチンチンネーナ
そうだ、遊ぶぞ、どう遊ぼう	ケジナチンチンネーナ
たのしく遊ぼう	
きょうは楽しく、たのしく遊ぼう	
あしたはどこで遊ぶかな	

歌詞をみれば分かるとおり、これは即興の掛け合い唄で、いつまでもどこまでも続く遊びの歌である。これでまず、ひとつ氣勢をあげると、おもむろに村の共同井戸にむかう。

共同井戸は村の入り口にあり、かたわらに香木が植えられている。香木はきわめて重要で、祭りの前日にどこの家でも、この木を切って、香を作る。

この井戸の前で、鉦や太鼓の陽気な囃子にのって「この井戸がいいかよ、あの井戸がいいかよ」と井戸をほめる唄をうたい、地神を踏むと、村の家を一軒ずつまわる。家につくと、まず門の前で厄を払い、次に井戸、ソングジュ台所、牛舎の順にまわり、縁起のよい唄をうたって、家内安全、無病息災を祈願する。



尚道の安東の松の種を借りてきて

あっちこっち撒くと、その松がだんだん大きくなって
小木になり大本になり、青々とした木になって
曲がった枝をおまえが直し、湿った枝をおれが清めて
草屋三間の家を建てて、軒先に四つの風鈴をつるし
タンクラン、タンクランと音をひびかせると、
犬を飼えば、大きくて丈夫になり
鳥を飼えば、鳳になり、
牛を飼えば、大牛になる
子どもが生まれれば、高官天爵になり
男の子なら、孝子になり
女の千なら、烈女になり
みんなが孝子忠臣になると
羨ましいかぎりだなあ

これは、家の中心であるマルに祀られたソングジュをほめる唄である。こうしてあちこち家の地神を踏むと、家の者は「コンリップ」というお礼をさしだす。それは、たいてい酒、米、飯、粟、麦、そしてお金のようなものである。酒や御馳走はその場でたいがい飲んだり食べたりしまうが、米は持ち帰って売り、お金にあわせて後で飲食をする資金にしたり、壊れた楽器の購入にあてたりする。

村をひと通りまわると、隣の村にもゆき、もしそこに農楽があれば一緒に楽しみ、その村のために地神を踏み、豊饒を祈願する。

農楽は、もちろん男だけのものだが、この日は朝から女、子供が見物についてまわり、農楽が終わると、集まって一緒に飲んだり食べたり、楽しみをともにする。

農楽の日の前日か早朝、道具のしまわれた倉庫の前で牛や豚を殺して肉を分け、共食をする。たいがい豚であるが、その時屠殺にたずさわるのは村のはずれの家に住む者であった。農楽の用具は、「コーサ」という一年任期の責任者がこれを管理する。農楽の技術は、だい

たい見よう見まねでおぼえるのだが、農作業の一段落した旧暦七月、八月ころから準備や練習がはじまり、男も女も年寄りも若者も、村中みんながあつまって、踊りや楽器をならい、花や衣裳を整える。

農楽の用具をおさめた倉庫には、さして大きくもないのに、祭りの道具のほかにも、葬式の食器などもなにからなまでに納められていた。大きな葬式の用具は別であるが、そのほかにも、かつては村の税として納める米もここに収納されていたのである。農楽隊の人たちは、この正月の地神踏みのはかにも、田の草とりなど激しい労働を共同でおこなう時には随時かりだされ、やはりケジナチンチンナーネのようなおもしろおかしい歌を即興で歌いながら鉦や太鼓をたたき、人々の仕事を助けたのである。

② 葬式と墓

松潭には、いまでも「喪契」という日本の葬式組にあたる互助組織があって、村のある家で死者がでると、家ごとに米を一升ずつだしあい、葬式が終わるまで、それぞれの分にしたがって力をかすことになっている(8)。

かつての松潭の葬儀は、死後5日目に行われるのが通例であったが、現在は3日目が普通である。死者が出ると、まず喪契の若い者がその知らせに歩く。何人かで組になり、遠くまで歩いて行くこともあるので、時間は2日ほどかかるのが普通であった。

死者の口には、死ぬとすぐ銭とくるみを含ませてやる。そうすると死者の口があかないと言われた。死者の湯灌は、近親にその作法に詳しいものかおり、これが行う。

四日目の昼に、男たちは墓を造り、女たちは食事の用意をする。夕方、村の倉庫から膳や器などの葬式道具を出す。これらの細かい道具は数が多いが、一つずつ数えてきちんと管理する。それを無くすと、喪主が弁償しなくてはならない。

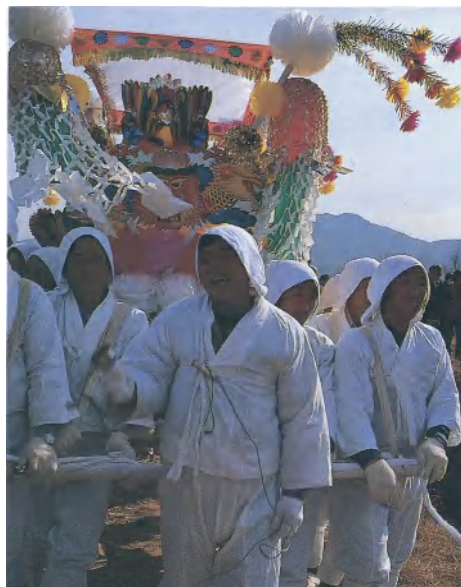
葬儀の山車をはじめとする大きな用具は、村のもう一つの倉庫に納められている。倉庫は村の裏山などの陰にあり、村の人たちは普段は恐れて近づかない。男たちはそこから用具を喪家にはこび、死者の棺を運ぶための山車を組み立て、飾りの花を作る。

死者は内房に寝かされている。5日目の日に、東から西の方向に向かって三度回してから、



死者を部屋の外に出す。内房の入り口の縁側には、瓢箪を半分にしたものを伏せて置き、それを踏み破ってから外にでる。南富鎮の子供の頃おこなわれたハルモニの葬儀では、この瓢箪がなかなか割れなかったので、伯父の一人が「さあ、お母さん、そんなに思いを残さずもう行きましょう」と死者に呼び掛けた。

死者はその後、山車に乗せられる。葬列は、まず「銘丁」「鶯豆」などの旗を持つ者が立ち、次に「カマ」という死者の冠、着物、履物を納めた輿が続く。この輿は、二人で運ぶ。次が山車で、さらに親族などがその後が続く。山車は16人で担ぎ、一人が山車の上に乗り、ソンドカ（先導歌）を歌い、ほかの者たちが合の手の掛け声をかける。先導歌は、大体3・4、3・4の音節からなる単調な、悲しい歌である。山車は、オニ（死者）がついているので大変重いとされるが、「重い」というとなお重くなるので、決して重いとってはいけない。山車は畑など死者の思い出深い所や坂道などの難所にかかる



と動かなくなる。先導歌を歌う者は、その度に「こんなに豊かな畑を残してどうして行かれよう」と死者の思いを歌う。すると、喪家の者が、あわててお金を包んで先導歌を歌う者に渡す。すると山車は動き始める。そのお金は、喪契の資金としてプールされ、後に飲食などに費やされる。

山の墓に着くと、棺は墓に納められ、棺の上には銘丁と鶯豆が置かれる。喪主がまず自らの着物に土を少し包んで棺にかける。これを「始土」といい、この後に親族などが用具で土をかける。土をかけ終わると、それを踏み固め、その時には踏み固めの歌がうたわれる。この歌は一種の労働歌であり、先導歌とは違った明るいリズムを持っている。この棺を下ろす過程は、女は一切見ることが出来ないで、墓の後ろなどに隠れているが、これが終わると姿を現わし、共同の飲食が新しい墓の前でにぎやかに行われる。



韓国の葬儀には、死者をいたむ儀礼と死者をなぐさめるにぎやかな飲食とが共存している。葬儀の間にも、死者の置かれた内房では悲しいすすり泣きが聞こえるが、男たちの控え室である舎郎房では、花札などの賭博が行われ、冗談や笑い声が絶えない。男たちは、内房で一泣きして帰って来ると、舎郎房で花札をはじめるのである。死者の葬列での哀悼の哀現もいわゆる「哭」という儀礼的な泣き方が要求されるのであり、しての涙とは性格を異にする。

しかし、こうした正式の葬儀をしてもらえる者は、いわば一人前の人間として天寿をまっとうした者のみであり、たとえば乞食のような正体のはっきりしない者の遺体は山で焼いてしまう。また子供や未婚のまま死んだ者のためには普通の墓とはちがった場所に墓があり、そこは「ちいさい墓＝童墓」（エドンミヨ）と呼ばれ、かつてはとても恐ろしい場所であると考えられていた。そうした者の棺は普通の場合のように深く埋めてもらうことが出来ないもので、しばしば狼などの獣の餌食となったのである（9）。

韓国の場合にも、日本の三途の川と同じように此岸と彼岸の間には「ヨダン」と呼ばれる川があるものと考えられているが、正式の葬儀をしてもらえない者の魂は、このヨダンを渡って一人前の人の行くあの世（チョスン）に行くことが出来ず、此岸と彼岸の間（オニの世界）を彷徨うものと考えられていた。村の人たちはこのオニをひどく恐れながらも、なお子供や未婚の者を正式にとむらうすべは持たなかったのである。

4 子供たちと村の生活

① 伝承社会の子供たち

ちょっと昔の韓国の村の子供たちは、農作業をぜんぶ手伝うのが普通であった。学校が終わるとすぐに畑に行く。赤ん坊の時から畑で育てられ、畑と親しんで暮らしてきたので、畑は子供たちにとってひとつの遊び場でもあったのだ。

川に沿って広い水田をもつこの村の農耕は、今も稲作が中心である。村の古老たちの話では、稲の品種改良はかつて盛んで、日帝時代にもよく行われた。日帝時代以前の米は稲に麦のような毛がはえていて、苗代を作らず直蒔きした。味も麦とよく似ていたという（陸稲かどうか確認）。

畑の作物は、大麦、小麦、蕎麦、トウモロコシ、黍、ゴマ、コチュ、豆が中心であったが、ことに豆は、大豆、小豆、インゲン、エンドウ等たくさんの種類があった。野菜は、白菜、大根、人参、ごぼう、キュウリ、なす、かぼちゃ等やはりたくさんあったが、とにかく少しづつなんでも作った。これは専門化され、単作が進んだ現在の農業とはかなり違う。

イモは、ジャガイモ、サツマイモ、サトイモを植えた。ジャガイモとサツマイモには幾つか種類があり、御飯の代わりによく食べた。サトイモは、家の近くの田に少し植えられただけで、祭りの時のハレの食事に供された。その他、山イモも食べたが、これは山で掘ってきたものである。（注10）

今ではすっかりなくなりましたが、稲作と畑作のほかに、ことに大切だったのは蚕である。蚕は一年に春と秋の二度、繭を作った。大概の家では、蚕は普通の部屋で作るので、蚕が始まると寝る場所がない。大概、部屋には老人一人が眠り、きめられた時間ごとに桑の葉をやって番をする。その他の者は屋外で眠る。蚕が桑の葉を食べるサワサワというあの音と休眠した時の静けさを、村の人たちは今でもよく覚えている。

蚕の仕事は、田植えや刈り入れといった農繁期と重なることが多く、とても大変だった。桑の畑は、治水もかねて川のほとりの荒れ地に多く作られた。土地の桑の木と日帝時代に移

入された桑の木があり、葉の形が違った。

秋になって桑の実がなると、子供たちはよくこれを食べた。これも、食べ物のなかった当時、お弁当の代わりに昼食に持ってくる子供がいた。日帝時代に入った桑は、葉が多かったが、あまり実がならなかったので、子供たちの評判はよくなかった。

今日では、病虫害の予防のために冬になると田の水をおとすが、かつて灌漑設備の十分でなかった頃は、冬の間も田圃には水がはられていた。これが凍ると子どもたちの恰好の遊び場になる。そして三月も終わりになり、この氷がとけ始めると、子どもたちは田圃に入ってタニシをとる。田のタニシは、池のタニシに比べてひとまわり小ぶりだが、味はよいとされていた。

三月、四月は、また松の皮をむいてその露を味わう季節でもある。枝をとり、その黒い表皮をはぐと裏に柔らかい皮なあらわれる。それを噛み、うす甘い露をたのしむのである。これには、子どもたちだけではなく、天人たちも加わった。また、特に食糧のそこをつく春の窮乏期には、これをそのまま食べたり、餅についたりして飢えをしのぐ事もあった。

この他、春になると、どこの家でも少しずつだか木綿と麻を植えた。ことに木綿は大切に、花の咲く頃は、雪のように見えた。また、これを道の傍らに子しておく、夜はふんわり白いものが浮かんで見えて、大変こわい。まるで鬼神のように見えた。

麻の栽培は現在では禁止されているが、これももちろん紡いで糸にした。そしてさらに、殻は屋根ふきにも使った。

村の女たちはムーレという糸車をたいてい特っていて、夏は庭先で、秋、冬、春は部屋にあつまって、みんながよく糸とりをした。糸とりは、昼の仕事で、夜になるとランプの下で機織りや、針仕事をすることが、多かった。

機織りのしかたは、嫁入り前に里で習い、明細（絹）、木綿、麻となんでも織ったが、明細がおもで、麻は夏（七、八月）に織り、木綿は秋に収穫して冬、春に織ることが多かった。

機の前で泣くこえは、天きくてやむ時がない
この機を織って、誰にやろうとて
そんなに上機嫌に織ってるのか
腹はペコペコで、いつ昼餉になるのか
三月、四月は、昼が長い

金詰炯さんの奥さんの歌うこんな機織り唄は、当時の女たちの気持ちをよく伝えている。

畑の仕事で一番たいへんなのは草とりである。ことにコチュとゴマの畑は、今と違って種蒔きの時期がおそいので、夏には一面びっしり草が生え、一日働いても30メートル位しか進まない。子供にとって、これが一番つらい仕事の一つだった。この畑仕事にも女たちの草取り唄がある。

特種な作物は、餅米、サトイモ、井草、セリで、これは家の近くの田に少し作る。セリは、

春先に川から野生のものを取ってきて、移植する。

蓮は村の池に自生していた。

農耕のほかに、子供たちには村の南側に広がる山での仕事があった。

子供たちは、春には山で葛をとる。これは山を荒らすので、山の持ち主には大変しかられたが、楽しかった。とった葛は、細かくきざんで日に干して澱粉にしてもよいが、そのままガムのように噛んで食べると、甘くておいしい。同じ葛でも、山の高いところの葛はだめで、水辺のものがよい。葛には、男の葛と女の葛がある。これもやはり小学校でお弁当を持つてることのできない千が、弁当箱に詰めて持ってくるのがあった。その他、初夏には蕨、ぜんまい等たくさんの山菜もとった。

農作業の比較的楽な夏は、学校から帰るとみんなで牛を連れて山に入り、草を食わせながら遊ぶ。山の向こうのチュクチョンの村に、果樹園があった。子供たちは山に入ると、この果樹園を襲い、果物をひとつ盗んで、チュクチョンの前にある川で水遊びをする。この遊びに夢中になると、大切な牛を見失うこともあって、たいへん叱られた。牛がいなくなると、村人は火をつけて一晩中捜しまわるのである。

秋になると、子供たちは山にはいって、毎日栗や椎の実を拾う。椎の実の水にひたし灰汁をぬいてから、澱粉をとりトトリムックを作るのでことに重要であった。

冬が近づくと、今度は柴を集めに山に入った。

このように、山は子供たちにとって仕事の間であると同時に大切な遊び場であったのだが、今では狼がでたり危険なので、大人たちでも入る人はいないという。

②食生活

田や畑の作物について触れたついでに、かつての食生活についても記録しておこう。

a) 肉と魚

肉を食べるのは、年に一、二回。後で述べるように正月十五日の祭りには、村で豚を屠り各戸で分けるが、そのほかの時はよほどのことがないと肉は食べない。

魚は、行商から買う干物が主で、鯖、明太、いか、たこ、鯛などだが、祭りには明太の干物を欠かすことができない。村にスルメを売る行商がくると、子供たちはスルメの目をもらいに集まってくる。スルメは高いが、目だけはサービスでただなのだ。子供たちにはこの目がたまらない魅力だった。

海の魚はともかく、大人も子供もよく川で魚とりをして、鮒、鯉、うなぎ、川えび、蟹などをとった。子供たちはみんな魚を素手で捕まえる術を心得ていた。そのほか、池には鯰や雷魚、田にはドジョウがいた。これらの魚は、とても豊富で日常的によく食べた。

ことに楽しかったのは、春になって田に水を入れる時に行われる「かい掘り」であった。この時は村中総出で池にゆき、魚をとった。どの家でも、たいがい盥いっばい位は、魚がとれたものだった。

b) 一日の食事

韓国では朝の食事が一番大切なので、朝はどの家も御飯をたく。といっても、米はほんの少いで、麦、粟、大根などが入っている(注11)。粟はとてもかたくて老人には食べられない。若い人でも、少し食べると舌が痛くなるほどだった。これに対して、大根飯はとても軟らかく、老人にも好まれる。しかし老人を大切にこの国では、ハラボジとホルモニのためにできるだけ御飯を用意し、女子供はほとんど米を食べなかった。

おかずは、多い家で5品、少ない家で3品くらい。味噌(トゥエンジャン)汁、白菜、キムチ、コチュジャン、トゥエンジャン、ねぎ、トラジくらいのものである。

昼は、朝の残りの冷たい御飯(寒飯)を食べるが、無いときはサツマイモ、ジャガイモ等で代用する。

夜は、残り物ですませることもあるが、たいがい御飯をたく。御飯のほかにククス(うどん)のことも多く、この準備にはたいへん手間がかかる。踏み臼で小麦を粉にして、うどんを打つのである。ククスの中には、かぼちゃを入れることが多かった。老人のいる家では、雑炊を作ることもある。白菜を入れた簡単なものだが、メルチ(ジャコ)をほんの二、三匹入れる。そのほか、スイトンに似たスチェビ、麦粥、ジャガイモ、サツマイモなどを食べることがあった。

ジャガイモ、サツマイモは、主食よりもおやつとして食べることの方がおおかった。

c) いろいろな食べ物

1) 豆腐

豆腐は特別な食べ物で、冬になると村中で、一日豆腐をつくる。その日は、主婦たちが村の一軒の家に集まって、一緒に仕事をする。子供たちは、みんなでその家について豆腐のかす(おから)を貰う。

2) ごま油

これも日を決めて、村の一軒の家でつくる。この滓もいまでは、家畜の餌だが、昔の子供たちにとっては魅力的なおやつだった。

豆腐のときと同じように、村の一軒の家にみんながごまを持ち寄って、きれいに洗い、機械で油を絞るのだが、旧式なのでなかなか思うように取ることができない。絞るかすはケクムといってとても堅く、いまでは家畜の餌だが、昔の子供たちにとってはやはり魅力的なおやつだった。



3) トゥエンジャン(味噌)とカンジャン(醤油)

冬になって霜が降りた頃、それぞれの家でトゥエンジャン造りが始まる。いつもは牛の餌をにる大きな釜で豆をたき、みそ玉を造り、冬の間中サランバンの天井にかけておく。オンドルのほどよい熱でみそが醗酵して、黴がはえた。

冬の間は、どこの家でもサランバンにこのみそ玉とサツマイモを保存していたので、サランバンを訪れると村中同じ匂いがただよっていた。（サツマイモはサランバンに保存したが、ジャガイモはいも穴を掘って保存した。そうすると三分の一位は凍って食べられなくなって、家畜の餌になった。凍って中が穴だらけになったジャガイモを「風がはいった」という）

こうして醗酵したメジュを適当に切って、日向で乾かし、完全に乾くと味噌の仕込みに入る。まず、ひと瓶の水の中に塩を入れてよくかきまぜ、ニワトリの卵を沈ませて浮き上がる程度の塩水をつくる。そこにメジュを入れ、ナツメ、ゴマ、唐辛子、炭をくわえる。漬けてから一ヶ月くらいは、日中は瓶の蓋をあけておき、夜はしめる。醗酵にともなう悪臭をのぞくためである。約三、四か月たった後、目の細かいチエ（ざる）でうわずみの汚れを掬い捨て、味噌をぎっしりと押し、密閉する。

この時、とれるうわずみが日本の醤油に似たカンジャンになる。

こうして味噌のしこみが完全に終わると、瓶の周囲に松の小枝、炭、唐辛子をはさんだ注連縄をめぐらし、よい味噌ができるように祈りをささげて、時をまつ。

4) コチュジャンとキムチ

やはり、冬の初めにコチュ（唐辛子）を踏み臼でついて、コチュジャンを造る。

コチュジャン作りには、まず米と麦を発芽させ、それを干してよく砕いたものを釜に入れて煮詰める。しかる後に、それをコチュと塩にあわせるのである。

キムチ作りも、冬の初めの大切な仕事である。

キムチには、白菜のキムチ、大根のキムチ、トラジの根を乾して漬けたキムチ、ネギのキムチ、唐辛子のキムチ、エゴマの葉で作ったキムチなどがあり、季節によってさまざまだが、特に大切なのは、冬の保存食である白菜や大根のキムチだ。



この仕込みにかかせないのが小海老の塩辛だが、これは簡単につくることができないので、村の人たちは秋になると行商が遠く漁村から運んでくるこの塩辛をかならず手にいれたのである。

5) 野菜の保存

キムチや味噌づくりに続いて、冬にむかう女の大切な仕事は、野菜を干して保存することである。大根の葉、小豆の葉、茄、里芋、かぼちや、ワラビなどの山菜、猿梨の筒、緑豆などを日に干しておいて、冬の間煮て食べる。

6) もやし

もやしは、今では簡単に手にはいるが、昔は祭りにつかう大切なハレの食べ物だった。祭りが近づくと、もやしを準備するが、茎の真っ白な形のよいもやしを造ることは難しく、主婦には大変な仕事であった。

7) ムック

秋になると、子供たちは山にはいって椎の実を拾う。これを日にほして乾燥させてから、水でさらして灰汁を抜き、粉にして澱粉をとり、トトリムックを作る。トトリムックは、一見コンニャクのような日本ではみかけない澱粉食品だが、春菊、葱などとコチュジャンで和えるととても美味しい。

ムックはまた、蕎麦からも作る。蕎麦を踏み臼でついて粉にして作るが、この場合はトトリムックとは違って白いムックが出来る。

ムックは、ジャガイモからも作るが、ジャガイモを水につけて澱粉を取ろうとすると、腐ってとても嫌な匂いがした。

8) 餅

餅には、ウルチ米の場合と餅米の場合の二つがあり、ペクソルギ（白雪餅：ウルチの粉だけで作った、せいろで蒸した餅）、シルトック {甑餅}、インジョルミ（餅米、餅アワの餅）、ジョルペン（四角や丸に型で押し切った餅）、バンダルトック（半月餅）、ソンピョン（松片）、キジトック、カレットック（細長く棒状に作った餅）、スクトック（よもぎ餅）などさまざまな種類がある。

ウルチの餅は、踏み臼で踏んで米の粉を作り、これを蒸して作る。これに対して餅米の場合は、米のままたき、その後、杵でついて餅にする。

シルトックは、ウルチの餅の代表格で、つぶした小豆をはさんで幾重にも重ねて作る。ソンピョンは、あんこの入った柏餅の中味といった餅だが、松の葉をしいて蒸すのが香ばしい。

インジョルミは餅米や餅アワをついて、小さな四角に切り、粉をまぶす。キジトックは、ウルチ米の粉にマッコリをくわえて練り、部屋の暖かいところに長い間おいて生地を膨脹させ、さらにゴマ、豆の葉、色素などを加えてむす。

これらの餅は、それぞれの祭りごとに何を作るのが決められていた。

たとえば、正月にはカレットック、端午にはスクトックとソンピョン、秋夕にはソンピョンとキジトック、十月の墓祭にはシルトック、インジョルミ、ジョルペン、還暦の祝いにはインジョルミとジョルペンといった具合である。

そして、秋夕のソンピョンが、「女の子がこれを上手に作ると、幸せな結婚ができる」とか「かわいい子どもを産むことができる」というように、餅にはそれぞれ由来が語り継がれていたのである。

餅は、ウルチが中心で、餅米は家の近くの田に、ほんの少し植えられているだけである。しかし、餅米もねばりがあり、独特の味わいがあるので捨てがたい。

子供たちは、踏み臼の音が聞こえると、祭りが近いを知り、指折り数えて待った。

9) 酒

祭りには欠かせない酒も、かつては自家醸造であった。酒の種類は、きわめて豊富で、マッコリ（濁り酒）、トンドン酒、焼酎などの醸造酒、蒸溜酒、りんご酒、チンダレー（つつじ）の酒、五味子酒、枸杞の酒などの果実酒、まむし酒などさまざまであった。

焼酎は、現在でも安東にこれを醸す名人のハルモニがいるが、一般にはなかなか難しい。

これに対して、マッコリとトンドン酒は、たいていの家にそれぞれの作り方があり、味が違った。

マッコリはウルチ米を蒸して、小麦麴と一回だけあわせた簡単な酒で、三、四日でできあがる濁り酒である。瓶に入れて醗酵をまち、頃合いをみて中味をしぼり捨てる。

トンドン酒はウルチ米に餅米をあわせて蒸し、二度、三度と小麦麴をくわえて醗酵をかさね、焼酎をまぜてチエ（ざる）で漉す。これは、透明な酒である。

5 昔語りの語り手たち

① 村の語り手

韓国の村にはちょっと前まで、村ごとにそれぞれ話好きのハルモニ（お婆さん）やハラボジ（お爺さん）がいて、子供たちはその話をよく聞いた。語りには特別に定められた時や場所はない。語り手は、夜になると村の親しい家を訪れて、ジャガイモやサツマイモ、それに蔽でた豆などを御馳走になりながら話を語る。また、夏の間は村の大きな木（堂山木）の下で涼みながら、あれこれ話をすることもあった。その話にも、きまったレパトリーなどはない。



村の実際の生活に基づく話が多く、特に村の変人・奇人をタネにしたものが好まれた。かつての村には、だいたい一人や二人の変った人がいて、この人たちは村人の語りの世界では重要な役割を果たしていたのである。

南富鎮が幼いころ知っていた村の年寄りたちは、たいがい働き者で死ぬまで田や畑にでたし、実際に畑で死ぬ老人も多かった。しかしその一方で、彼等の仕事が年相応のものであったことも事実だったから、みんなゆっくりと世間話をして過ごすことも好きだった。



年寄りたちのうちでもハラボジの地位は高く、村ではたいへん尊敬されていた。儒教のゆきわたったこの地方では、子供の場合でもハラボジには敬語を使い、たいへん距離をおいて接することが普通であった。彼等の話は、農作物の作り方や天気の見定め方などが多く、しまいにはたいがい「近頃の若い者は礼儀を知らない」という説教がひとつつくから、聞いている方もなんとなく煙たい。

これに対して、ハルモニは気のおけぬ語り手で、子供たちの方でもパンマル（仲間言葉）を使って親しく話をきいた。だから、いわゆる昔話はハルモニから聞く機会のほうが多く、特にオニやトケビの話は男が語ることはめったにない。こういう、こわくて、楽しくて、し

かもなんとなく怪しげな話は、ほとんどハルモニのみによって語られる。男たちは偉そうに構えて、なかなか語ってくれないのである。

しかし、幼い子供の世話は、母親だけではなく、ハルモニが担当することも多かったから、家で子供たちにせがまれて語る彼女たちの話には、ときには教育的配慮がはたらくこともある。たとえば川でよく水遊びする子供には、こわい水のオニの話をして、注意をうながす。夜おそくまで外で遊ぶ子供たちには村を徘徊する女のオニの話をして、家にはやく帰るようにさとし、という具合である。床についた子供たちに、わざと怖い話をすると、子供たちはハルモニの懐にしっかりしがみついて眠るのである。

②来訪者たちの語り

村の内部の語り手のほかに、村の外からなかば定期的に村を訪れ、変わった話をもたらしてくれる来訪者型の語り手がいる。そのなかでも、重要なのは行商人である。行商人は竹細工の籠や瓶を売る者が主で、村の家に逗留しながら三か月くらいかけて一つの地域をまわり、主として地域の特産品（安東の場合はゴマと唐辛子）と商品を交換しながら、長い旅をつづける。時には旅の行きに品物を預け、帰りに特産品を回収するという気の長い話もあった。

彼等の出身地は決まってい、竹細工商人の場合は全羅道の津陽の付近の人たちが多く、強い誂の言葉を話し、これも今では考えられぬことだが、迎える村人にとってはまさに現在の外国人に接する時のような面白さがあったのである。

行商人はだいたい30歳すぎの既婚女性で、3、4人が雄になって背の何倍もある背負い子に籠を背負ったり、頭に乘せたりしてやってくる。こうした女性たちは、村に宿をとるとその家の家事の手伝いをしたりしたが、きちんとした部屋を与えられることはまれで、大抵は板の聞か軒先か納屋のような所に逗留した。彼女たちは夫婦一雄でくることがもあったが、時には春をひさぐこともあったという。こんなこともあって、竹の行商は、かつては賤視された人々の仕事であった。

行商人たちの宿は、このハルモニの家のはかにも村から少しはずれた所に一軒あった。ここに住む人たちも、今はどうに引っ越してしまったが、かつては負債を負ったか、そのほか何かの理由で村八分にあい村を離れた人たちで、時には巫女のように不思議な能力をもつこともあったという。旧正月十五日の農楽の日に豚を屠るのもこの人たちの役目であった。

行商人の宿はもちろんただ同然であるから、逗留先では食事の後などに旅の途中などで経験した世間話やあちこちの村の噂話にまじえて、昔話を語る。普段はほとんど村を一步もでることのない村の人たちに比べて、彼等はたいへんな情報通であったから、時には遠く離れた村の縁談をとりもつことさ'えあったという。

大人だけではなく、子供たちも彼等がやってくると、ハルモニの家や村はずれの家にひそかに集まって話を聞くことがあった。見つかるるとたいへん叱られるので、子供ごころにもその話が大変おもしろいと同時に、その場に近づくことが恐ろしく、それがいつその好奇心を誘い、興味をかき立てたものだった。彼等の語りはトケビの話をはじめ多岐にわたったが、とくにエロティックな話が多く、子供たちの前でも平気でそんな話が語られた。村の聞

き乎たちはそんな話を一方で楽しみながらも、一方では忌避する気持ちが強く働くこともあった。

南富鎮が、子どもの頃、一度だけ行商人夫婦が宿を乞いに門口にたったことがあった。ハルモニは、それを断ったが、幼い南富鎮はどうしてもこれを泊めたくて、「行商を泊めなければ、自分が死ぬ」といって、縄をもって裏山にむかってとびだした。驚いたハルモニは行商を受け入れたけれども、こんなエピソードも、子どもと行商の間の気持ちを伝えていておもしろい。

③ その他の来訪者

昔話を語ることはしないが、行商のほかによく村を訪れたのは乞食である。乞食は、家を訪れると決して悪びれる風はなく、むしろ堂々と施しを受けて去っていった。

乞食のほかに癩者が訪れることもあり、この時は子供たちはぜんぶ家の中に引き籠もる。子供たちは癩者が子供の肝を食べると聞かされていたので、彼等をたいへん恐れていたのがある。癩者にはその居留の村があるといわれ、村人に侮辱されたり、評いをおこしたりすると、大挙して村を訪れることもあったという。

しかし一般には、癩者の家族は彼等と別れて暮らすことを望まず、彼等も村の中にひっそりと暮らし、村人たちもそれを許容したので、あちこちの村に癩者が住んでいたのである。

彼等は、昔話の語り手ではないが、村の語りの世界ではやはり好奇のまどであり、重要な役割を果たしていたのである。

6 語りの時としての夜とその喪失

南富鎮の記憶する話上手のハルモニは、今では名前は分からない。韓国の女の人は名前を呼ばれることはなく、みな生まれた土地に由来する宅号で呼ばれていたためである(12)。龍浦という近隣の村から嫁いだそのハルモニは、みんなに「龍浦宅」と呼ばれていた。彼女はよく南家に遊びにきて、思いつくままにオニ、トケビ、火の玉、世間話、体験談などを自在に語った。

彼女の語りが、時にひどく恐ろしく、また時に唄笑をさそったのは、その話術もさるこながら、彼女の話がすべて実際の村の人々や出来ごとと結びついていたためである。たとえばトケビ話を語るときには「その火のような目は村のどこの誰、とがった耳はその誰」という風に容貌さえ具体的に喚起された。またその出現の場所も限られて、特定の坂や辻や池にきまっていたのである。昔話を語る時ですら「昔むかし、ある所に」などと行儀よく構えることはなく、主人公も回陰の場所も、すぐに村の誰か、何処かと想像がついた。まして世間話の場合には、その描写は微にいり細にわたった。

南富鎮が当時よく見聞きした話に、たとえば村の狂女の話がある。村で一番の権威のある書堂の漢文の先生の娘であった彼女は、悲劇的な結婚をして、夫と別れた。しかし村にもどっても、厳しい父親によって家に受け入れられず、村の共同墓地を住家として暮らしていた。やがて気のふれた彼女は、夜を恐れず、夜になると共同墓地を出て、村の周囲を歩き回り、

村人たちに恐怖を与え、様々の話を生んだ。彼女のような狂人の噂は、トケビやオニや大の玉の話と組み合わせられて、やはり村の語りの世界では欠くことのできない存在であった。

住谷一里には1974年まで電気がなく、時計もまれであった。南富鎮が14歳の時、村に電気がひかれた。電気がひかれると村人はテレビやラジオの前に集まり、話が急速に消滅する。夜が恐ろしい時間ではなくなり、昼と夜との境界が消滅したのである。かつては、昼と夜が人々の意識のなかではっきり区別されていて、日が落ちるとともに夜が訪れた。それはオニの時間であり昔語りの時であった。語りは夜と切り離すことができない。こうした夜を失って、龍浦宅のハルモニの話もつまらなくなった。

そしてセマウル運動で道が整備され、車が自由に出入りするようになると、村の境界も消滅する。村のトケビや盗賊の話の舞台であった坂や辻もありきたりの場所になってゆく。たとえば村の北西の入り口の蛇岩谷はかつては盗賊など恐ろしいものである場所としておそれられていたのだが、今では軍事施設かおり、ライトが明るいので何か恐ろしいのか分からない。山もすっかり削りとられ、木々のかわりに軍の詰所が立ち並び、歩哨がじっと立っているのである (13)。

竹の行商人はもう訪れることはなく、たまにやってくる商人たちも徒歩ではやってこない。今日では、彼等はトラックできて用が済むとさっと引き上げてゆく。皆いそがしく、語りどころではないのである。

昔話の記録は現在、韓国ではかなり盛んで、資料集も少なくない。しかしそれを読むといかにも無味乾燥で、かつて耳にしたハルモニたちの話とはほど違い印象を受ける。それは、語りと活字という差もあるだろうが、この違いはテープやビデオを使っても埋めることの出来ないものである。

語りは、語りの時と場から切り離すことはできない。かつてとつぷりと暮れた夜の闇に包まれながら聞いたトケビや狂女の世間話は、いま公民館や敬老堂で老人達を集めて昼間テープを前にして聞くのとは、まったく別のものである。話の内容は同じでも、そこには話の生命が欠如している。

この20年ほどの近代化の歩みの中で、人々の世界観は根本的に変化した。南富鎮は、いま改めてかつての村を訪ねて見ると隔世の観があるという。村を取り巻く20里（8キロ）四方をめぐったに出たこともなく、テレビ・ラジオといった情報手段もなく生活していた時代と現在とでは、同じ人の心の在り方もまったく変化した。かつて40歳であった働き手は、いまは60歳になり、村の語り部になりつつあるのだが、かつてとはとても同じ人とは思えぬ言葉を語る。こうした人たちの現在の世界観は、確実に語りの中に浸漬して行くであろうし、語りをその根元から目に見えぬ形に変えて行くのだろう。

かつて子供であった南富鎮は、ハルモニに連れられて、故郷の知保里（醴泉郡知保面）を訪れたことがある。村は南富鎮の村から30里（12キロ）ほど離れていて、途中ネースンチョンを渡る長い道程であった。幼かった南富鎮は、ハルモニがその時、黒い頭巾を頭にスッポリかぶっていたのを、よく覚えている。当時は、「嫁が実家に10年以上も返らないと縁起が

悪い」といわれ、久し振りに帰るハルモニは、その厄を払うために黒い頭巾を身に付けていたのである。

二人が朝早くから歩きつづけ、漸く故郷の村を見下ろす小高い丘に着いたとき、辺りに多い松の木を見ながら感慨深げにハルモニが語った。

「わたしが村を出て嫁に行くときは、輿に乗ってこの山を越えたが、その時はこの桧はずっと細く小さかった。両親はわたしをここで輿から下ろして、お前はもう二度とこの山道を越えてはいけないよ。ここから村がよく見えるからしっかり見て覚えておきなさいっていったんだよ」

事実、ハルモニは婚家の仕事に追われて、ほとんど実家に帰る間もなくその生を送ってきたのだった。かつての韓国の人々の生活は、たとえばこの様なものであり、昔語りはその暮らしなかで生命を得てきたのである。

注

- (1) 松潭には、現在、南氏と金氏のほかに崔氏と朴氏が各一戸ずつ存在する。
- (2) 張炳昌氏の「趙靖の日記からみた醴泉の壬辰倭乱」（『醴泉文化』第3号、1988年、醴泉文化院刊行）によれば、1592年11月4日「唐橋に駐屯していた倭賊が夜陰にじょうじて醴泉の柳川と龍宮の天徳院に乱入して、周囲40余里を一時に焚蕩した」とある。天徳院は、ソントンのすぐ西にあたる現在の間浦面シンギにあったとされる。
- (3) 韓国語は、きわめて厳密な敬語法をもち、年上の者や目上の者には必ず敬語を使用する。これにたいして、パンマルはいわゆる「仲間言葉」で、ごく親しい者の聞か、目下の者に対してのみ用いる。カオシルの子ども遠の近隣の大人たちに対するパンマル使用は、彼等の両班としての優越意識をあからさまに示すよい例だが、こういう待遇を甘受した人々の感情は、いまも根強い敵対意識となって残っている。
- (4) この点に関しては、たとえば竹田旦氏の『木の雁』（1983年、サイエンス社刊）や李完全氏の「韓国家族の構造」（中根千枝編『韓国農村の家族と祭儀』1973年、東京大学出版会所収）などに詳しい。
- (5) 南富鎮の母（姜粉達・1935年生）の場合は、結婚と同時に内房に住んだ。彼女の舗と姑は、ともに舎郎房で生活した。彼女の姑は、大変しっかりした人で、死ぬまで家の管理をして、母は市場で物を売っても代金については全て姑に報告した。嫁の分担する家事は、姑の指示にしたがって台所で食事の用意をすることであり、子どもが生まれると、その世話は姑がしてくれた。しかし、同じソンタムでも金粉伊ハルモニ（1917年生）の場合は、53年前に結婚したが、結婚と同時に舎郎房にすみ、舅と姑は内房にすんだ。金粉伊ハルモニの場合も、家の管理は姑がうけもった。お金の出し入れだけではなく、食事のたびに炊く米も姑が出し入れしたし、炊いた御飯を茶碗によそるのも姑の役であった。金粉伊ハルモニは、姑の死後、内房にうつり、ずっとそこで暮らしている。

- (6) ここで、「クムジュル（禁縄）」と呼ばれる注連縄について、述べておこう。根深の村でクムジュルを門口に張り渡すのは、およそ次のような機会である。
- ① 子どもの生まれた時。男の子の場合は、左縄に唐辛子、炭、根の小枝をはさみ、女の子の場合は、炭と根の小枝をはさんで門口に渡しておく。これは家によって期間がことなり、七日間の場合と十日間の場合がある。
 - ② 前述のソンジユを新しく安置するクツの日。これは一日だけ。
 - ③ 子どもを売る時。子どもが病弱であったりして、親の手におえぬ時、ムーダン（巫女）の指示にしたがって、誰か特定の相手に子どもを買ってもらう。買い主は人間のほかに井戸や大木などさまざまであり、人間の場合には買い手と子どもとの間に養父母の関係が一生つづく。この場合も左縄に白い紙をはさみ、一日だけ門に張り渡す。うしたクムジュルの呪術的な役割は、日本の注連縄の場合とよくにている。
- (7) 竹田旦、前掲書、p. 142～144. こうした竹田氏の見解にたいして、李光皇氏はやはり前にあげた「韓国家族の構造」のなかで、韓国の家督権の継承を慶尚南北道にみられる東南型と全羅南北道にみられる西南型の二つの類型に分け、東南型の場合には「家長であった父親か年をとり60歳をすぎるか、息子が一人前になって十分に活動すれば、父親は息子にすべての権利を移譲し活動を中止する」「この東南型が日本の隠居制度の原型ではないかと思われる」と明確に述べている（李先皇、前掲論文、p. 30およびp. 31）。李先奎氏のこの指摘は、日本と韓国の文化の関わりを考える上できわめて興味深い。
- (8) 契は、韓国の伝統的な相互扶助組織であり、村には普通、村の共有財産を管理したり道普請や用水などの共同事業をおこなうための洞契や、祖先祭祀のための親族による門中契などがある（松潭の南氏の場合は、「南氏宗親会」と呼ばれている）。村にはこのほかに、田の労働かいそがしい時に互いに助け合う日本の。イヤモヤイに似た「プマン」という労働交換や、家を建てたり修理したりする時に助け合う「連力」という相互援助がある。
- また女たちを中心とした頼母子請のような契も盛んだが、この村では「婦女会」と呼ばれ、月々わずかのお金をつみため、これを運用して一年に一度旅行をしたりしている。この旅行が夫婦同伴になったのも、セマウル運動以降の新しい傾向である。
- (9) 松潭には、いまでも狼がいるが、昔はよく狼が里まで下りてきて、家の台所まで入ってくることもあったという。現在でも村には、子どもの頃、狼にかまれて山まで引いていかれたが助かった女の人がいる。彼女の喉には、いまでも狼の喘みきずが残っている。
- (10) 山イモは古文献にも現れる、韓国人にとって大変古い食べ物の一つである。たとえば『三国遺事』の「紀異第二」の百済の武王の項に「彼（武王）の子供の頃の名は、薯童であった。その人となりの器量が大きくて、はかり難く、いつも薯預（やまいも）を掘って売って生活したので、国の人たちが、それによって名づけた」とある。（『三国遺事』、林英樹訳、1975年、三一書房刊、上巻、p. 162）
- (11) 御飯に野菜などの入ったカテ飯は、米（3）と蓬（7）、米（3）と麦（7）、米（3）

とアワ（7）、米と豆と小豆といった組み合わせが普通であった。

- (12) 韓国の既婚女性は、実名よりもその出身地によって「宅号」で呼ばれることが多い。たとえばソウル出身の主婦は「ソウル宅」と呼ばれるのである。

【付記】

本橋は、1988年の9月から1989年3月まで、当時、慶熙大学の客員教員であった樋口淳と、慶尚北道の安東市に近い豊山綜合高等学校の教員であった南富鎮、仁荷大学の大学院生であった金美栄の三名が協力しておこなった慶尚北道醴泉郡佳谷一里（松潭）でのフィールド・ワークの記録である。

作業はまず、松潭の出身である南富鎮から樋口淳がかつての村の暮らしについて聞き取ることから始まった。しかるのちにこの地方の昔話を中心に修士論文を用意していた金美栄を加え、1988年10月から1989年の3月まで5回にわたり、現地での聞き取り調査を行った。聞き取りは主として樋口と金が行い、テープに記録し、これを南と金が整理した。

原稿の執筆には樋口があたったが、調査ごとに整理された事項を原稿化し、これを南がチェックして記述の誤りをただし、さらに次回の調査の内容を広げる形をとった。最終的な原稿は、日本に帰国した樋口が、韓国の南と沖縄の琉球大学に客員研究員として留学した金との間で、原稿をふくめた情報の交換を行うかたちで最終的にまとめた。